

環地中海地域における貞潔規範

芝 紘子

— その特質と由来 —

はじめに

近年、文化を考える上で、また家庭・社会関係においてジェンダーが鋭く問われている。生物学的性のまわりに構築された社会的・歴史的現象であるジェンダーが、民族・宗教・職業・社会的地位などと共に重要な下位文化を成し、女性を最大のマイノリティに押し止めてきたからである。

ジェンダーは社会の誕生、文化の発展とともに歩んできたがために、社会の生成に関わる一定条件に呼応する特徴を文化的に包摂しながらも、文化によって様相を異にする。それゆえ、ジェンダーを文化理解のひとつの座標軸として見ることによって文化のあり様や特性を窺い知ることができる。本稿においては、女のジェンダーのあり様を示す最も有力な指標である貞潔性（主に処女性）に対するさまざまな観念・態度の中で環地中海地域に特徴的な、親族殺害をも惹起する貞潔規範の位置づけをおこない、それがどのような要因によって醸成されたかをスペインを足場として検討してみたい。他地域との共通点・相違点を明らかにする過程で、「地中海文化」の存在の是非も問うことができるであろう。

一 処女性に対する文化パターンの多様性

世界に知られる文化の処女性に対する観念は多様であるが、大きくは婚前交渉を許し処女性を不問とする文化と、処女性にさまざまな意味合いを付与し重視する文化に分けられる。後者はさらに二分できる。ひとつは、処女を権威者(神、悪魔、父親など)に帰属させて権威者/代理人に神聖なる破瓜を委託し、その後初めて新郎は新婦と交合するとする文化である。たとえば、シンガル族(インド)では娘の実父や義父、もしくはは神官や勇猛とみなされる人物が実際にか儀式的にか破瓜を行い、カネロ族(エクアドル)の新郎・新婦は初夜を悪魔に捧げる。こうした慣習は、権威者に帰属する処女への恐れ、かつて権威者に禁じられた性行為を行う罪悪感、新婦に出血させた罪悪感、さらにはこうした行為の懲罰として女体に宿るとされる怪物によつて去勢されはしないかという恐怖感などから新郎を解放するという観念に由来する(引用文献48)。原始ヨーロッパにおいても慣習によつて部族の長、呪術師などが新郎に代わり破瓜を行った(50・144)。中世における領主の初夜権(一定の供物を伴う儀式(横になった新婦の体を飛び越えるなど))はその残滓であるという。処女性重視のもうひとつの型は、婚姻時の処女性を要件とするか、望ましいとする文化である。かつてゲルマンの新郎は新婦の処女性を讀えて *morgengabe* を渡し、今日でもアムハラ(エチオピア)やキリバス(ミクロネシア)では婚礼儀式に破瓜の印を公開する。環地中海およびスペイン文化が接ぎ木された中南米では「名譽」観念と結びついて処女性・貞潔性が重視され、その喪失に対して「名譽殺害」さえ行われてきたことはつとに名高い。Ethnographic Atlas (II) によれば、知られている世界の四百の民族中、処女性を高く評価する文化は多数に昇る。マードックはこの資料から、処女性に大きな関心が向けられて結婚の要件となったり、その喪失に対して処罰が用意されるのは、一般的に独自の伝統を保持する自律集団が中央集権権力と競合的に併存している場合や、婚姻に大きな富の移転が伴う場合であると分析する(27)。

二 ヒエラルキー社会における貞潔性の要求

婚姻時の富の移転が処女性の重視・管理をもたらすことは、ユーラシア大陸全域にわたる「拡散移転 *diverging devolution*」に伴う現象としてグディが指摘する。しかるべき嫁資と処女性保持により娘の価値を上げ昇嫁婚させることは、娘に良縁を、家族に良い同族ネットワークと社会的昇進をもたらすがゆえに、嫁資はその登場当初から社会的地位と結びついていたとして、処女性重視を中央集権化社会の現象であるとするとする(15: 25, 16: 103, 106, 120)。オートナーも、女の純潔性にグループの名誉・地位が依存するという観念は究極的には昇嫁婚によってもたらされ、中東、西南アジア、インド、中国、日本にまで及ぶあらゆるヒエラルキー社会に普遍的であり、結婚に大きな価値を置かないポリネシアでさえ、婚前の貞潔性が強調されているとする(30: 8-12, 31: 400-401)。

なるほど、古代から多くの社会が貞潔性を要求してきた(たとえば、エシュヌンナ法典やアッシリア法)としても、はたしてそれがそうした社会の文化的特徴と言えるだろうか。ポリネシアの社会上層部で婚前の貞潔性が強調され、毎晩娘の膝を固く縛り、あるいは一生独身を強い、そうした娘を犯した者を死刑に処すほど、共同体全体の神聖さを象徴するものとして処女性が重視されたにしても、それは「文化」的重視と言えるだろうか(文化を括弧で括ったオートナーは、もしかして支配的現実との乗離を意識していたのではないか)。文化を体现するのは民衆の抱く観念や行動様式であるはずである。ポリネシア民衆は婚前交渉に非常に寛容であり、「*sleep crawling*」(日本の「夜這い」に相当)が半ば制度化されている。ポリネシア文化を特徴づける親族のあり方や他の要因にその由来を求めなければならぬであろう。女性の地位についてオートナー自身、父系・族外婚・嫁資制社会／文化パターンでは婚姻関係によって規定され再生産機能に焦点が当てられるのに対し、双系・族内婚・女性相続社会／文化パターンでは第一義的に親族役割で見られるとしているのである。文化の特徴がヒエラルキー制度から直接的影響を受ける社会上層部の態度のみで語れないことは、たとえば、女性首相を多く輩出す

る一方、一般女性はセカンド・シチズンの地位に止まっている西南アジア（パキスタン、インド、スリランカなど）の例からも明らかである。オートナーのヒエラルキー理論によれば、各ヒエラルキー内の男女の差は他のヒエラルキーの同性との差異より小さく、同一ヒエラルキー内では男女平等に向かう傾向があり、上流階層の女性はその（親族の）地位によって見極められる（それゆえ、政治を世襲とする家族の女性は首相になれる）。しかし、それ以下の一般女性には親族システムの結婚志向によって抑圧的効果もたらされるのである（31：402）。

オートナーは論考を終えるに当たって、ヒエラルキー社会の二種の上述文化パターンはさらに歴史的な文化的差異によってヴァリエーションが生まれると述べるが、本稿の目的はまさに、文化的差異を生む社会的・歴史的背景を貞潔規範について探索することにある。処女性要求を嫁資制と結びつけるグデイさえ、初婚における新婦の処女性重視という地中海地域の特徴は社会的・宗教的ルーツを持つとするのである（15：212）。

三 貞潔性の意味合いにおける多様性

では、どのような背景・要因が文化的差異を生み出したのだろうか。糸口として、貞潔性重視がどんな意味合いで求められ、何を象徴するのを見よう。これまで貞潔性が誰に、何にとつて重要なのかという観点からなされた文化的比較は少なく、しかも地域が限定されている。できるだけ多くの社会を比較することが客観性を高める上で望ましいが、文献と紙幅の制約から本稿ではイベリア半島から西南アジアあたりまでを見てみたい。

地中海世界の西端に位置するイベリア半島において中世以来中心的存在であり続けたカステイリヤ王国では、中世盛期以降、女性の貞潔性が家族の男たちの名誉と結びつくようになり、女の「名誉」そのものとなった貞潔性を喪失した娘・妻は家族の不名誉の生き証人として社会的／肉体的に家族自身により抹殺されたほどであった（㉔）。この女性の貞潔性に係わる名誉観は近世、ユダヤ人の血が混入しない純血性に依拠する名誉と並んで脅迫観念化していき、スペインが鉄製貞

操帯の発祥の地とされるほど妻のセクシュアリティへの猜疑心・嫉妬心が強まり、逆説的にドン・ファンなる人物が文学に結実し、今世紀後半においてさえ処女喪失の噂だけで娘は村に居場所を失ったのである。

ポルトガルは地理的には地中海に面していないが、一二世紀半ばまでカステイリヤ王国の一部であり、社会・経済・精神構造の基盤を形成したレコンキスタ（国土再征服）と再入植を共有したため、価値観はカステイリヤと酷似していた。男は家庭を持ち家族への責任を担って初めて一人前とされ、女の貞潔性の維持が家族と夫の名声を確かなものとした（6:100）。一六世紀後半、同国宣教師ルイス・フロイスはセクシュアリティをも含む日本女性の行動の自由さに驚きを示したが、裏返せば、当時のイベリア半島では貞潔重視のため行動がいかに拘束されていたかを物語る。一方、同じ半島のカタルーニャはカロリング帝国支配下にあつたため歴史的にフランスとの関わりが深く、社会の上部構造はすべて封建制を中心に形成されていた。中世における特徴的な犯罪は、庶民間での侮辱・名誉毀損行為であつたカステイリヤとは対照的に、領主への家臣の裏切りであり、領民一般は名誉の客体ではなかつた。*honor* がもつぱら下賜された土地や免税特権を指したことは、封建制が確立され早期に階層が固定化に向かつた北西ヨーロッパ諸地域と同じである。ここでも名誉は優越権として騎士階層のみに止まり、民衆には広まらなかつた（39:257-258）。カタルーニャで貞潔性が求められたにせよ、それは娘では嫁資、妻では正当な血の継承との関連においてであつた。事実、カステイリヤとは対照的に中世後期においても女性性は行動を拘束されず、一日のかかりの時間を通りや広場で過ごしたとされる。

こうした半島の様相から言えることは、貞潔重視の意味合いは歴史的要因によるところが大きく、かならずしも地理的位置に基づかないこと、貞潔重視が社会全体に広がるには民衆自身がその觀念の媒体たる名誉の客体であること、それは平等主義と結びついていることである。それゆえ、カタルーニャでの家の存続を目的とする貞潔重視を環地中海地域に通じる特徴として日本のイエ制度下の農村と比較するアサノ・タマノイ(2)は、地中海地域を単に地理的に捉えてその歴史的背景を無視し、重視の意味合いのヴァリエーションを看過するものに他ならない。カタルーニャは今日でも北部の大西洋沿岸地帯とともに少数派の直系家族地帯であり続け、核家族は別所帯を持つというスペインの文化的嗜好および、地中

海ヨーロッパ全体での核家族の支配的実態とは異なる、むしろ北西ヨーロッパに近い特質・精神風土を有する地域なのである。

南フランスの片田舎では、家族が娘の処女性を結婚まで守った栄光の印として初夜の血痕のついたシーツをベランダから吊り下げる。他の地中海地域同様、貞潔規範と密接に関連する男女の役割・活動領域の分離が極端である(35)。

イタリア、ことに南部とシチリア、コルシカなどの島では今日も家族の女性の貞潔性保持は男の責務であり、家族の名誉を左右する(14:88)。不貞の妻殺しも一九七一年の家族法改正以前にあっては五年以上の刑罰は稀であった。

ギリシャの山岳民や農民間においても処女性性は家族の名誉であり、やはり初夜のシーツが公開される(5, 12)。この価値観は旧ユーゴスラビアなど、同じバルカン半島の他地域にも共通する(8, 44)。性的侵害は報復合戦の最大要因である。

地中海南岸・東岸のイスラーム圏での処女性重視はつとに名高い。今日でも、その喪失の疑い・誤診、あるいは手を繋ぐなどの無邪気な親交だけで儀式的でさえある親族殺害が、「恥は血によってのみ雪がれる」というアラブの諺通りに行われる(30)。地中海ヨーロッパと異なり血縁を重視し名誉が集団的であるため、不貞の妻殺しは生家の男たちが行う。また、父方平行イトコ婚が志向されるのは、血縁の団結を脅かす婚姻関係の矮小化、労働力としての子供の獲得とともに、処女性保持の責任を父系親族が身請けすることによって親族の団結を示すためでもあるという(17:32-57, 73-75)。

さらに東につらなる西南アジア地域、パキスタン、インド、バングラディシュにおいては、マンデルbaumの比較研究(32)によると、女性労働をほとんど必要としない北部の小麦生産地帯ではセクシュアリティ管理が厳しいが、女性労働が不可欠である稲作地帯では緩やかであり、女性観も小麦地域ほど否定的・抑圧的ではない。生産における労働の寄与度がヒンドゥかイスラームかという宗教の違い以上に女性の地位に大きな影響を与えているという。では小麦生産地域におけるセクシュアリティ管理を含む厳格なパードラ慣習(ヴェール着用と幽閉による「慎ましき」の強要)は何に由来するのだろうか。パキスタンでは今日でこそパードラは社会に広く及ぶが、元来は女性労働なしで生活できるという経済的優位性を

表象する上流階層に固有の慣習であった。それが、植民地化によって流入するよそ者への警戒心と上層の行動様式の模倣から、経済的に両立しえないはずの中・下層にまで広がったとされる(24: 252-258)。バングラデシュでも、全身を包む *Burqa* の着用はここ半世紀のことで、それ以前は町の上流階層の慣習であった(32: 297)。

日本においても、女性のセクシュアリティ管理は本来イエ制度と儒教を採用した上流階層に限られた。足入れ婚や夜這い慣習が数十年ほど前まで広く農村地帯に存在し、ムラに処女はほとんどいなかったとされることは、民衆が女性の労働力重視によって娘の処女性を問題としなかったことを示す。嫁は何よりも働き手およびその再生産者と見なされてきたのである。これは、南アジアと東南アジアを民族・文化・言語において分かつコックスバザール(ミャンマー・バングラデシュ境の町) 以東の稲作地域の伝統社会に共通する一般的傾向なのかもしれない。「処女膜」に損傷のない娘という意味での「処女」概念の民衆への浸透はここわずか六、七〇年に過ぎない(18, 28)。

四 地域性と貞潔性重視の方向性

以上の概観から二点が明らかとなる。ひとつは、西南アジア以東におけるセクシュアリティ管理はヒエラルキー社会に特徴的な地位の表象という本来上流階層に由来する現象であること、逆に、地中海地域(ヨーロッパ・イスラーム圏)では民衆、とりわけ国家権力の周縁に位置する人びとの間で貞潔性が強烈に意識されてきたことである。この地域は水平結婚や族内婚が支配的であり、嫁資とは元来縁がない世界である(15: 258)。ポルトガルでは地主層の結婚でさえ嫁資はない(6: 95)。イトコ婚は南イタリアでもスペインでも好まれ、後者では「イトコ primo/prima」が夫婦間の呼称となったほどである。イスラーム圏においても昇嫁婚の欠如を特徴とする父方平行イトコ婚が志向されてきたことはつとに名高い。ただし、イスラーム圏ではヨーロッパ地中海(34: 63-64)と異なり、王族でも一般的に厳しい性規範が女性に課される(一九八三年に欧米で報道された、処女を喪失した王女の銃殺はその一例)。これは、ヒエラルキー制に起因するのではなく、部族の長を

出自とするアラブの王族が部族民と同一の価値観を共有しているためではないだろうか。それはまた、白衣での聖地巡礼で可視化するアッラーの前での平等主義によっても強化されたであろう。

もう一点は、貞潔性の文化的・社会的重視を意味合いにおいて三つに分類できること。第一は、親子間の血／家筋の正当な継承を求める上で貞潔性が重視される縦関係である。日本のイエ制度や北西ヨーロッパの封建制における直系家族、インド・スリランカなどのカースト制下の社会などが該当する。後者ではカーストの純粹さを守るためカースト・エンドガミーが伝統的であり、異カーストとの婚姻が禁じられ〔ただし、インドの一部では上下に隣接するカースト間でのハイパガミーが慣習であり(38: 61, 73)〕、それに反した者はアウトカーストとなる。これは紀元前にも遡る汚穢観念に基づく構造的かつ必然的な帰結とされる(9: 237, 271, 47: 25-51)。第二には、家族の社会的昇進のために貞潔性を求める場合で、それを斜め関係としよう。とりわけ階層間が流動的な社会で顕著である。たとえば、一、二世紀のイタリアにおいてローマの嫁資が復活し、その結果、処女性が求められたが、そこには地中海貿易で財を成した商人階級の強い社会的昇進志向が介在していた。第三は、本来縦・斜めの関係とは係わらず、もっぱら当該家族の男たち(夫・父親・兄弟など)にとつて貞潔性が重要な意味をもつ横関係である。ここでは女性の貞潔性の保護が男の義務である。それに失敗することは男の最大の恥とされ、奪った者ではなく奪われた者が面目を喪失する。地中海の大多数の地域が横関係であることは前述の概観から明らかである。この地域で新婦に処女性が求められるのは、遡って新郎が「角生やし」にならないためなのである。

五 環地中海地域における貞潔観念の由来

では、地中海地域に広く認められるこのヒエラルキーに由来しない、横関係を象徴する貞潔観念は何に由来するのだろうか。まず、その観念を醸成したとみられる素地、次に、そこからどのように貞潔観念が生成されていったかを見てみたい。これは取りもなおさず、貞潔規範と密接に結びついている「名誉」「恥」観念の醸成の由来を検証することでもある。

(二) 貞潔規範を生み出す素地——環境と核家族

プーデルによれば、地中海世界は豊かであるどころか貧しい敵意に満ちた土壌と不安定な気候に条件づけられ、つねに飢餓の一手手前である。この生態学的環境が生活意識や価値観の形成に大きな影響を与えたと言う(4: 390-391)。キャンベルもサラカツアニ(ギリシヤ)の家族が血族・姻族以外の家族と敵対関係にある原因を、乏しい物質的環境における牧民の攻撃され易い生活——隣接草地への相互侵入、羊の盗み合い(競合的贈与交換)——に求める(5: 51, 205, 210)。スペインの農村についてミツチェルも、土地や資源の恒久的不足が隣人家族に対する猜疑心、邪視信仰を生んだとする(26: 100)。シュナイダーは地中海全域に及ぶ貞潔性に重きを置く名譽・恥規範の由来を一連の生態学上の力に求める仮説を提示する。元來牧畜業にしか向かないのにもかかわらず、地中海による農業技術の伝達の容易さと都市からの人口圧力によつて農業が牧畜業を圧迫したため資源の争奪戦が熾烈化し、それによつて牧民特有の敵愾心が助長された。游牧・遊牧生活には永続的物体としての境界が存在しないため、つねに財産と一時的な境界を油断なく見張る必要があるのである。農民も牧民・農牧民が定住したもので、農民間にもこの行動様式が導入された。農業と牧畜業は相互依存しながら同じ資源をめぐる競争するので、いつそのの係争を呼ぶ、と(32)。アルバニアおよび北アフリカ、中東の部族社会を考察するブラックミショーは、必要量に見合う資源・食糧生産の「絶対的欠乏[*total scarcity*]」の環境下では物質的欠乏感が抽象的・主観的概念にまで入り込んで、觀念領域においてもゼロ・サム世界を出現させ、それによつて地中海に報復社会が出現したとする(33)。事実、この精神世界は他家の成功・繁栄が己の存在を脅かすと考えるサラカツアニやエーゲ海のニソス島社会、「ある人の幸福は、他人の不幸」というフランスの諺などにかいま見ることができるといえる。

こうした社会の家族とはどのようなものか。地中海世界の特徴的局を成すのは核家族であるが、それは上述の厳しい生態学的環境ばかりではなく、均分相続やその他の歴史的要因によつてもたらされた。均分相続はイタリア、スペイン、ポルトガルで支配的であり、その当然の帰結として核家族がある。また、レコンキスタが中世末まで続いたカステイリヤ王国では入植民への土地供与が均分相続と相まって核家族化を助長した。游牧や移牧同様、均分相続で細分化された農地、

あるいは地中海で一般的な農牧業の競合地域では、シュナイダーが指摘するように、境界に対する警戒心が必然的に強まり、それは核家族の内に団結心と外界への敵愾心を増幅させたであろう。ギリシヤやスペインでは今日でも聖家族に準えた核家族に対する崇敬にも似た感情と隣人への敵意・疑惑・羨望が併存することが指摘されている(5, 19: 86, 21: 154)。核家族外ではいかに近親者であっても敵対的となる。一度新処居住すれば兄弟間は猜疑心と不信に満ち、低地アンダルシアのようにしばしば口を聞かない敵対関係になったり、ギリシヤやニソス島のように無償労働のやり取りをしないようになる。家族の保護を目的とする闘争は何であれ道徳的となり、利己主義が価値そのものとなる。家内の規範とは逆に、嘘と嘲りが対外的態度において重要な地位を占める(10: 393)。「家族が国家」なのである(38: 97)。

このエトスはバンフィールドが南イタリアに見いだした“amoral familism”(核家族外での道徳規範の欠如。フォスターの言う“Image of Limited Good”)と酷似する。シルヴァーマンはその起源を究極的に農業システムに求めて言う。土地の不統合性と不安定さ、経済活動の細分化、農業労働での孤立、土地所有での大きな格差などが、核家族の支配的広がりと同立、家族以上の大きな機能グループの欠如、共同体としての脆弱さなどの社会構造をもたらし、ついで、こうした社会構造が“amoral familism”を引き起こす。核家族外関係での道徳的制裁の欠如はそこで永続的絆の乏しさを反映する、と(42)。

(二) 貞潔観念生成のメカニズム

ではさまざまな要因から生成された核家族の下で、なぜ女性の貞潔性が重視され、闘いの焦点となったのか。シルヴァーマンは中部イタリアで支配的な *mezzadria* (農場の折半経営) の複合家族とほとんどが核家族である村民(自営農民・非農業者・地主)との貞潔観念を比較し、その相違の由来を経済的環境に求める。前者では女性は労働力としての資質が重視され、その他の資質は貞潔性を含めて問われない。事実九〇％は妊娠後の結婚とされる。後者では多子は経済的負担となるため豊穰性は望まれず、また結婚の保証もない。それゆえとりわけ娘の純潔への世評が重視される、と(43)。ただし、こ

の説は家庭内倫理に力点を置くもので、環地中海特有の緊張した家族外関係を十分説明するものではない。他説を見てみよう。

シュナイダーによれば、移牧民や遊牧民にとって子供(家畜を追い闘う者としての息子、財産を固め同盟の礎となる娘)の再生産は経済的・政治的勢力の基盤の拡張を意味するため、草地や水と同じく女性が奪い合う資源と化したと言う(37)。キャンベルとブラックミシヨは婚家における女性の帰属の曖昧性に求める。前者によれば、地中海地域のような敵意に満ちた(牧畜)社会で生き延びるのに必須である同盟関係を築く必要から政治的・経済的理由で結婚させられた女性は婚家に忠実であるという道徳的理由をもたない。その上意志薄弱さとセクシュアリティの邪悪さが加わり、女性は誘惑に引きづられて婚家を裏切りかねない。他人にとってよその家族の団結具合を試したり冒瀆するのに、その女性の性を侮辱するほど確かな方法はない。そのため、女性のセクシュアリティが争点になったとする(5)。後者によれば、「絶対的欠乏」から生まれたゼロ・サム精神世界では名誉・名声は土地や富と同列に置かれるため、名誉はすぐれて報復合戦の原因となり、また物質的資源をめぐる闘争の口実になる。何が名誉であるかは社会によつて異なるが、女性の貞潔性にかかわる名誉は各地でほとんど同一の暴力的反応を見る。なぜなら父方居住によつて生家と婚家に忠誠心が引き裂かれ、帰属が曖昧であるがゆえに女は紛争の焦点となる。貞潔性の強調は「恥」に象徴される曖昧さをなくさせるためであり、それゆえ欺いた場合、儀式的殺害を招く、と(3)。

敵対的な外界から家族を守り、内部結束を強いるこのエトスは、また家族の無傷性・完全性の意識を呼び覚ます(10・393)。その完全性の意識が貞潔性と象徴的に同一視されたとするのは、ジョヴァンニとフリードリッヒである。前者によれば、女はその被侵入性という解剖学的特質ゆえに外部者に侵入されやすく、家の境界が油断なく警戒され家族の財産や身体が損なわれていない比喩的指標となるがゆえに、女のセクシュアリティが重視された、と言う(17)。この見解は、肉体の境界は危険もしくは不安定なあらゆる境界を象徴しうるとする、ダグラスの汚穢に関する比喩論によつて補強される。肉体のさまざまな部分をもつ機能やそれらの部分の相互関係は他の複雑な構造を表す象徴の源泉となり得、また、社

会構造に内在すると信じられている能力や危険が凝縮して人間の肉体に再現されている。どんな観念構造においても侵され易いのはその周辺部であり、肉体の開口部は特に傷つき易い部分を象徴する。境界線が不安定なところではどこでも汚穢の観念が出現してそれを支えようと言う(9: 219, 230, 253, 262)。また、フリードリッヒによれば、完全性が何であるかは文化によってその形態・内容が異なるが、複雑な行動規範と名誉規範によって象徴される。より大きな観念体系としての名誉は元々第一義的に性的特質と男女間の関係に根ざすものであるが、その体系の一部をなす性に基づく名誉観念は究極的には個人／集団の完全性意識と結びつく(13)。

個々の家族／家族集団の完全性を保持するのは男の責務とする観念は、とりわけ自律集団もしくは国家権力の周縁地域において強烈である。家族の名誉はその完全性に対する男の管理能力への世評である(35: 43) という意味において、親族殺害をも惹起する貞潔規範は環地中海地域を特徴づける男支配の具現化でもある。ジェンダーを文化的に理解する上で最も重要なのは名声の構造とするオートナー説(3)は、とりわけ環地中海地域について当てはまる。貞潔規範を完全性の意識に求める解釈は、女性の資源化説以上に説得的であり、父方居住が該当しない地域や、核家族が必ずしも生態学的環境からのみ生じたのではない地域に対しても有効である。

(三) もうひとつの要因——大宗教における「処女」信仰

宗教は文化・社会における女性の役割やイメージを作り、それを強化する単一の力として最も重要なものである(33: 9) 以上、グデイが指摘するように、貞潔規範もその例に漏れないであろう。シュナイダーは女の単なる再生産機能の有用さ以上に、神聖さを象徴するものとして処女性が名誉観念において争点となつたとし、フリードリッヒも名誉観念へのキリスト教の影響を指摘する(13: 300) が、これまで、いつ、どのようにという具体的な説明を欠いていた。

カステイリヤの例で言えば、貞潔をめぐる名誉観念は、前述の諸条件による核家族化、そこから生まれた平等意識、牧羊業と農業の競合(一三世紀初頭から顕著) および均分相続による土地の細分化(百か所以上の分散も稀でない)が生む猜疑

心と敵対心、世評という匿名の裁定者への恐れが最大効果を上げる孤立した集居などの諸要因によって醸成されたと考えられるが、その時期が中世盛期であったことは意味深長である。改革派修道会によってマリア信仰が急速に広められた時期とほぼ一致するからである。一二世紀ころから民衆間でマリア名が著しく広まった(22:2)ことは、マリアが象徴する処女性重視観念の浸透を物語るものに他ならない。そのマリアの象徴は男の目で見、男のための機能のみから自己を見るという女の社会化に大きな役割を果たし、気付かぬ内に劣位と従属的精神をもたらしたとされる(23:246-249, 36:49)。処女信仰は生身の女性を否定するものであり、名譽観念と結びついて女性に刃を向けていったのである(40)。

一方、イスラーム圏において処女性は世俗的価値しかない(7:29)。これはキリストを一予言者と捉えるため、マリアをその処女性によって神聖化する必要がなかったことと関連しよう。しかし、クルアーンが女性の「慎み」として生殖器の保護にたびたび言及し、さらに名譽との関連で女性におけるその欠如を暗示することで名譽と慎みを象徴的に結合させたと思われる(1:67-68)。したがって、地中海全体において貞潔規範は大宗教以後の可能性が高い。この点からも、貞潔規範は自律集団の自治を穿つため家族の女に対する男の支配を弱めようとする宗教や国家の中央集権勢力に対抗する家族主義に起因するなどとして、起源を古代にまで遡らせる説(30:38:39)には首肯できない。事実、イスラーム以前にあつては男女は性的に自由を享受していたとされ、古代ギリシャでは「処女膜」の存在は知られておらず、*virgin*に当たるギリシャ語の *parthenos* は外見と態度から総合的に判断されるもので、必ずしも性的完全性を意味するものではなかった(45:76, 105, 167)。イリアスにおいても婚前の貞潔性に対する関心は低い(3:30)。「処女膜」と結びついた貞潔性規範はまだなかったのである。ギリシャ・ローマの肯定的な性モラルから否定的への方向転換が、魂と体の二元論による肉体への忌避ゆえに性を罪に近いものとし、それとの絶縁に最高の価値を置いたキリスト教の指針によるものであることは人口に膾炙している。宗教は本質的に想像において性的とされるように、聖母マリアの無原罪の御宿り教義を打ち出す際、「処女膜」の存在を暗黙の前提とした(45:172)。それが結果的に、四世紀当時の産婆による不確かな「処女膜」の言説に權威を与えたと思われる。マリア信仰は処女性の高揚とともに、環地中海地域に特異な強迫的「処女膜」信仰の確立に寄与したと言えよう。一

五〇〇年頃の戯曲「ラ・セレスティナ」に見るように、「処女膜」再生手術が行われるようになったのである。

以上の検討から、環地中海（地理的に規定されない）における貞潔規範は、ヴァリエーションを持ちながらも、家族の完全性を象徴する（もしくはそれを競う男のゲームである（17: 57, 22: 100, 46: 289））名譽觀念に由来し、この点によってヒエラルキー制のメカニズム（階層の純粹性の維持・社会的昇進）や直系家族形態に由来する貞潔規範と区分されうること（それゆえ、処女性について親族グループにとつての象徴的意味合いを強調する解釈を行うのは双系・族内婚・女性相続社会とするオートナーの区分は当たらない）、それは直接的には、生態学的環境や歴史的要因から生成された核家族の排他性と敵愾心、父系制家族での女性の帰属の曖昧さ、「処女膜」と結びついた貞潔性を重視する宗教などが複合してはじめて醸成されたものであると言えよう。さらに、貞潔規範には間接的ながら、「名譽」觀念の醸成には必須の要因として、宗教理念や歴史的環境によつて惹起される平等・対等意識（この上に個人・家族の名譽の客体意識が立つ）、それに地中海特有の、孤立した狭い空間での集居（33）と中央権力からの周縁化を挙げることができる。ここから、「緩やかな地中海文化」は存在すると言えるであらう。

主要参考文献

- (1) Autoun, Richard T., "On the Modesty of Women in Arab Muslim Villages: A Study in the Accommodation of Tradition", *American Anthropologist* 70, 1968, pp. 671-697.
- (2) Asano-Tamanoi, Mariko, "Shame, Family, and State in Catalonia and Japan", *Honor and Shame and the Unity of the Mediterranean*, ed. by David D. Gilmore, A special publication of the American Anthropological Association, number 22, Washington, D. C., 1987.
- (3) Black-Michaud, Jacob, *Cohesive Force. Feud in the Mediterranean and the Middle East*, New York, 1975.
- (4) プロートル、フェルナン（濱名優美訳）「地中海——環境の役割——」藤原書店、一九九一年。
- (5) Campbell, J. K., *Honour, family and patronage. A study of Institutions and Moral Values in a Greek Mountain Community*, Oxford, New York, 1979.

- (9) Cutliero, J., *A Portuguese Rural Society*, Oxford, 1971.
- (10) Davis, John, "The Sexual Division of Labour in the Mediterranean", *The Northern Shore of the Mediterranean*, New York, 1984, pp. 17-50.
- (8) Denich, Belle S., "Sex and Power in the Balkans", *Women, Culture and Society*, ed. by Michell Zimbalist Rosald and Louise Lamphere, Stanford, 1974, 243-262.
- (9) タタラス、メブリ (塚本利明訳) 「汚穢と忌避」思潮社 一九八五年。
- (10) Du Boulay, Juliet, "Lies, mockery and family integrity", *Mediterranean Family Structures*, ed. by J. G. Peristiany, Cambridge, 1976, pp. 389-406.
- (11) Ethnographic Atlas, *Ethnology*, vol. I, 1962, pp. 113-134, vol. II, 1963, pp. 109-133.
- (12) Friedle, Ernestine, "The position of women: appearance and reality", *Anthropological Quarterly* 40, 1967, pp. 97-108.
- (13) Friedrich, Paul, "Sanity and the Myth of Honor: The Problem of Achilles", *Ethos* 5, 1977, pp. 281-305.
- (14) Giovannini, Maureen J., "Woman: A dominant symbol within the cultural system of a Sicilian town", *Man* (N. S.), 16, 1981, pp. 408-426.
- (15) Goody, Jack, *The development of the family and marriage in Europe*, Cambridge, 1985.
- (16) ———, *Production and Reproduction. A Comparative Study of the Domestic Domain*, Cambridge, 1976.
- (17) Holy, Ladislav, *Kinship, honour and solidarity. Cousin marriage in the Middle East*, Manchester, 1989.
- (18) 川村邦光「オトメの身体——女の近代とセクシュアリティ」紀伊国屋書店 一九九四年。
- (19) Kenny Michael, *A Spanish Tapestry: Town and Country in Castile*, Gloucester (Mass.), 1969.
- (20) Kressel, Gideon M., "Soricide/Filicide: Homicide for Family Honour", *Current Anthropology* Vol. 22, No. 2, 1981, pp. 141-158.
- (21) Lisón-Tolosana, Carmelo, *Belmonte de Los Caballeros. A Sociological Study of a Spanish Town*, Oxford, 1966.
- (22) Mandelbaum, David G., *Women's Seclusion and Men's Honor. Sex Role in North India, Bangladesh, and Pakistan*, The

- University of Arizona Press, Tucson, 1988.
- (23) Martin Doyle, Patricia, "Women and Religion : Psychological and Cultural Implications", *Religion and Sexism. Images of Women in the Jewish and Christian Tradition*, ed. by R. R. Reuther, New York, 1974, pp. 9-40.
- (24) McClure Pastner, Carroll, "A Social Structural and Historical Analysis of Honor, Shame and Purdah", *Anthropological Quarterly*, 45, 1972, pp. 248-261.
- (25) McLaughlin, Eleanor Commo, "Equality of Souls, Inequality of Sexes : Women in Medieval Theology", op. cit., Religion..., pp. 213-266.
- (26) Mitchell, Timothy J., *Violence and Piety in Spanish Folklore*, Philadelphia, 1988.
- (27) Murdock, George Peter, "Cultural Correlates of the Regulation of Premarital Sex Behavior", *Process and Pattern in Culture. Essays in honor of Julian H. Steward*, ed. by Robert A. Manners, Aldine Pub. Co., Chicago, 1964 pp. 399-410.
- (28) 牟田和恵「戦略としての女——明治・大正の「女の言説」を巡って——」『思想』八二二号 一九九二年。
- (29) 中根千枝『家族を中心とした人間関係』講談社 一九九一年(初版一九七七年)。
- (30) Ortner, Sherry B., "The Virgin and the State", *Michigan Discussions in Anthropology*, 2, 1976.
- (31) ———, "Gender and sexuality in hierarchical societies : The case of Polinesia and some comparative implication", *Sexual Meanings. The Cultural Construction of Gender and Sexuality*, ed. by Sherry B. Ortner and Harriet Whitehead, Cambridge University Press, Cambridge, 1981, pp. 359-409.
- (32) Papanech, Hanna, "Purdah : Separate Worlds and Symbolic Shelter", *Comp. Stud. Soc. Hist.* 15, 1973, p. 297.
- (33) Pitkin, Donald S., "Mediterranean Europe", *Anthropological Quarterly*, 36, 1963, pp. 120-129.
- (34) Pitt-Rivers, Julian, "Honour and social status", *Honour and Shame. The Values of Mediterranean Society*, ed. by J. G. Peristiany, Chicago, 1966.
- (35) Reiter, Rayna R., "Men and Women in the South of France : Public and Private Domains", *Toward an Anthropology of Women*, ed. by R. R. Reiter, New York & London, 1975, pp. 252-282.

- (36) Saunders, George R., "Men and Women in southern Europe : A review of some aspects of Cultural complexity", *The Journal of Psychoanalytic Anthropology* 4 (4), 1981, pp. 435-466.
- (37) Schneider, Jane, "Of vigilance and Virgins : Honor, Shame and Access to Resources in Mediterranean Societies", *Ethnology*, X, 1971, pp. 1-24.
- (38) ———, & Schneider, Peter, *Culture and Political Economy in Western Sicily*, New York, 1976.
- (39) Serra Ruiz, Rafael, *Honor, honra e injuria en el derecho medieval español*, Murcia, 1969.
- (40) 芝崎千「スペインにおける女性の貞操をめぐる観念——中世におけるその形成過程」『比較家族史研究』第七号、一九九二年参照。謄「貞女は足を折って家の中」は「La mujer honrada, con la pierna quebrada y en casa」に訂正。
- (41) ———「スペインにおける姓名システム——その由来に関する一考察」『西洋史学』一七八号、一九九五年、一一七頁。
- (42) Silverman, Sydel F., "Agricultural Organization, Social Structure, and Values in Italy : Amoral Familism Reconsidered", *American Anthropologist*, 70, 1968, pp. 1-20.
- (43) ———, "The Life Crisis as a Clue to Social Function : The Case of Italy", *op. cit.*, *Toward an...*, pp. 309-321.
- (44) Simić, Andrej, "Management of the Male Image in Yugoslavia", *Anthropological Quarterly*, 42, 1969, pp. 89-101.
- (45) Sissa, Giulia, *Greek Virginity*, Cambridge, etc., 1990.
- (46) Wolf, Eric R., "Society and symbols in Latin Europe and in the Islamic Near East : Some comparisons", *Anthropological Quarterly* 42, 1969, pp. 287-304.
- (47) Yalman, Nur, "On the purity of women in the castes of Ceylon and Malabar", *Journal of the Royal Anthropological Institute*, 93, 1963, pp. 25-59.
- (48) Yates, Sybille L., "An investigation of the psychological factors in virginity and ritual defloration", *International Journal of Psychoanalysis*, II, 1930, pp. 167-184.